

死刑執行人

山田浅右衛門とサンソン

丸尾聡

世の中と演劇するオフィスプロジェクトM 上演台本

登場人物

【フランス】

シャルル・サンソン・ド・ロンヴァル 小林達雄

テオドール 小山貴司

王 廣田健

親方 鈴木貴大

親方の娘 横澤有紀

シャルル・アンリ・サンソン 森田匠

新聞屋 奥山貴章

パン屋 鈴木貴大

石鱈屋 小田篤

パン屋の女房 柴山美保

石鱈屋の女房 横澤有紀

ルイ16世 廣田健

議長 柴山美保

ギョティエヌ 矢内久美子

裁判長 奥山貴章

貴婦人 平山空

少女 坪井未来

判事1 小山貴司

判事2 横澤有紀

判事3 小田篤
売春婦たち 坪井未来 柴山美保 矢内久美子 横澤有紀
熱狂する市民

【江戸】

山田浅右衛門吉時 小田篤
吉宗 廣田健
側近 鈴木貴大
山田浅右衛門吉利 小田篤
吉亮 奥山貴章
いさ 平山空
門人 鈴木貴大
牢役人 丸尾聡
平助 小山貴司
勝麟太郎・海舟 丸尾聡
若い女 坪井未来
舞う女たち 坪井未来 柴山美保 平山空 矢内久美子 横澤有紀

【現代】

オヤマダダダダシ リアルマッスル泉
オヤマダアキコ 横澤有紀
ナガタ 小山貴司
モトミヤ 鈴木貴大

タダシの父親
刑務官1
2
3
4
5
医者の声
上司
アキコ母親
アキコ父親
宮沢ちえ
死刑囚たち
様々な声

鈴木貴大
森田匠
奥山貴章
廣田健
小田篤
矢内久美子
小田篤
丸尾聡
柴山美保
鈴木貴大
坪井未来
廣田健
森田匠
登場人物たち
小田篤
小田篤

- 芝居は一座が「死刑執行人」の芝居を上演するという意図で書いた。もちろん、上演の演出家に、その演出は拠る。
- 衣装は、死刑執行人については、その関連性を明らかにしたい。
- 死刑執行人は、特別に、赤、白、緑の三色を、あるいはいずれかの色を、体のどこかにまとっているだろう。
- 舞台装置は、高見が必要である。そして、これが一座がやっている芝居である事を現す工夫が欲しい。
- 一人の俳優がいくつかの役を演じる事を考えながら書いた。

プロローグ

一座の面々が「東西、東西」と口々に。圻が入って口上になる。

口上

誰かと誰かの恋のたわむれのお話が、まこと皆様の心をくすぐったり、滑稽なやりとりと調子が、憂さを解き、現世を忘れさせたり、

あるいは血が滾り体がその奥から心底沸き立つような物語を紡ぐ、この場所で、これよりお届けいたしますのは、そのどれもなお話でございます。

お聞きください、皆様。

我らが演じますのは「死刑執行人」の過去、現在、未来の運命、その暗闇に光をかざし浮かび上がった姿のみ。

どうか寛容のお心でご覧下さいますよう。

まずは「死刑執行人」についてお話し申し上げます。

執行人、

処刑人、

首斬り役人、

刑務官、

ハングマン、

ムッシュ・ド・パリ、

マイスター、

有罪判決の執行者、

様々に呼ばれますこの職業は、洋の東西を問わず、国というものが成り立ち、法というものが出来ましたならば、そこに同じく産まれ落ちました。

それ以前、執行の多くは、たとえばその一族、たとえばその村の住人、それらコミニユティ全員の参加によって行われておりました。執行人は「代理」ということになりました。国が長じて国家となりいく中で、命じるものは神から王様、そして国民へと移り変わり、執行人は、望むと望まざるとに関わらず、「すべてを自らの手で行う」「人による人の死に最も近い」その役目を果たして参りました。現在に至るまで。

そして、
最も忌むべき職業として蔑まれ恐れられ、
あるいは隠され、

その代償としていくつかの特権と報酬を得、

時にはスターのような扱いをされたものもありましたが、

その生業はどう理屈をつけようと精神に治らぬ傷を持たずして

何人も生涯を終えられるものではございません。

そう、彼がその一人です。

初代のサンソン。シャルル・サンソン・ド・ロンヴァル。

フランスの死刑を司ったムツシュ・ド・パリ、その人です。

公開死刑 (次の場と連なって)

雷鳴。音楽。初代サンソン、シャルル・サンソン・ド・ロンヴァルがいる。書齋に座っている彼は、彼の「仕事」のことを思い浮かべている。執行台がしつらえられたパリの広場。熱狂。見せ物である死刑執行。酒、歌、セックスまでもがそこにはある。死刑囚の似顔絵と罪状を記したパンフレットが売られている。死刑執行は熱狂する見物人たちの「祭り」のなか

行われようとしている。執行台を囲んだ輪舞。彼が斧を用い、執行しようとした時、人々の中から死刑執行人が浮かび上がる。

ロンヴァル　これはなんだ。この胸の内を覆い隠す、黒い雲のごときざわめきは……。まずはやるべきことではないのか。

タダシ・アンリ・吉利・吉亮がいる。

ロンヴァル　それをはっきりとさせなければならぬ。

すべてが幻のように消える。

初代サンソンの憂鬱と子孫への手紙　1693年（元禄六年　五代將軍綱吉の時代）

執行が終わり自宅の書齋にロンヴァルがいる。

ロンヴァル　わたしは、今、たいていの貴族よりも裕福となった。だが、その代償にこの胸の内を覆い隠す黒い雲のごときざわめきを……。この眼で見つめなければならぬ。シャルル・サンソン・ド・ロンヴァル、さあ、どうする……。わたしは神を信じている。神の教えに救いはあるのか？

ロンヴァルの前に聖書が現れる。

ロンヴァル　いや、だめだ。神の恩寵を受けるのは、市民の範疇にあるものだ……。

ロンヴァル ……いや、待て。よくよく思ってみれば、これは、誰にでもよくある心のまやかしなのではないだろうか。神の代理人である王からの命を受けたこの身に、黒い雲などどこにもありはしない。

王が登場する。

王

神の加護を受けるフランス王は、本証書を見る全てのものに告げる。パリ裁判区における刑執行の職務は、シャルル・サンソン通称ロンヴァルに拠ってのみ遂行されることを決定し、以下を布告する。パリ市場から、以下のごとく徴収する権限を持つこと。卵を直接背負いもしくは手で運ぶ商人からは卵一個、荷馬車の場合は各一台について半カートン、陸路水路を問わず、グリーンピース、麻の実、粟、クルミは慣例通りさじ一杯、バター、チーズ、淡水魚を運ぶ……。長いなあ。まだあるの？ 以下同じ感じで。はい。

王、証書を放り、消える。ロンヴァル、ひざまずき落ちている証書を受け取る。

ロンヴァル たしかにわたしは法の加護を受けた。だが、実際はどうだ。我が生業の仲間である、動物の皮はぎ人、便つぼの清掃、癩病病みの駆逐、道路の死体掃除人、墓堀人、娼婦、薬草売り、ユダヤ人、トルコ人、ジプシーら異教徒。私生児。一見彼らより優遇されているかに見えるが、彼らよりずっと……。敵を殺した兵士は讃えられ、決闘で相手を殺した者は許されるが、処刑台で人を殺す死刑執行人のみが恥辱で覆われ、忌み嫌われるのがこの世の習い……。せめて……。テオドール。テオドール。

召使い、テオドール登場。

ロンヴァル 私と同じ名を持つ7歳の息子、シャルルの家庭教師は見つかったのか。
テオドール 残念なことでございます。まだ引き受け手はありません。

ロンヴァル 報酬は望みのままと伝えたのであろうな。

テオドール 仰せのままに。

ロンヴァル パリから百数十キロだぞ、あのルーアンの学校は。そこでも身元が知れ、やむなくパリに戻った息子に教育を施そう事も出来ぬというのか。

テオドール お探し致します。もう少し家庭教師を。

テオドール退場。

ロンヴァル 学校にも通えず、家庭教師のなり手もない……。だが、大きくなれば彼の運命は決まっている。王の子は王に、執行人の子どもは執行人に。

ロンヴァルの心に黒雲が広がる。

ロンヴァル わたしは罰を受けつづけるのか。あのとき、ボアシール侯の軍隊の大尉の地位を捨て、恋を選んだ罰を。このいかにも人間らしい行為の行く末が、私を苦しめ続けるのか……。そうだ、今、何か光りが見えた。あのとき、私の亡き妻の父親、「親方」と呼ばれていた死刑執行人はこういった。

親方、娘、浮かぶ。

親方 問題は、おまえが我ら親子についてまわる憎悪と恥辱を分ち持とうとするほどに、娘を強く愛しているかどうかだ。そうでなければ、おまえはやがてわしを軽蔑するだろうし、産まれてくる子どもにもその気持だが、病のように伝染していくだろう。

ロンヴァル、執行人の証しを受け取り、執行人となる。

ロンヴァル やがて不幸にも娘は亡くなり、恋を失った「死刑執行人」と母親のいない子どもだけが残された……。そうだ、わたしだ。神の書物さえあてにならぬのなら、わたし自身が書こう。わたしがわたしでしか書けぬありのままの事実。子孫を呪われた一族としたことの弁明と、その行く末を見据える決意の表明として。

ロンヴァル。書き始める。

ロンヴァル 神は、その無限の慈悲の心で、われわれの肩に、耐えさせようとする十字架を背負わせたもうた。神の下せし不幸に、慣れぬ事が出来ぬほど苦しいものは決してなく、あり得ない事に思われた自分の運命へ反逆したもの、いつしか耐える術を身につけていった。だが私は恐れるのである。子どもは親の意思によってしか存在しないものとはいえ、子どもたちが自分の境遇と、本来父親から期待していいはずの境遇との不可思議な奇妙な違いに直面し、不満を感じるのではないかと。わたしは、子どもたちとその子どもが赦すべき理由があると思うなら私を赦し、非難するのが相当と思うなら非難できるように、わたしが今、ここにある理由と、これからとそれからのわたしの行いを、1693年の12月11日木曜日より、書き始める。

月が中天に昇っていた。子孫・4代目のサンソン、シャルル・アンリ・サンソン、アンリがいつの間にか、先祖の手記を眺めている。

アンリ (読んで) 見届けるのだ。子どもたちを。わが魂は天上界に行くことは無論適わず、かといって、法に律儀に従った者として、地獄の獄卒でさえ扱いに困り、宙をさまようだろう。運命がそうであるならば、私は見届けよう、様々に形を変えて、ある時は、時の営みを超え、異国の地にさえ舞い降り見届けるのだ。

ほのかな月の光がこの暗闇をごくわずかでも照らす事を信じて。天を覆いつくす黒い雲もいつかは晴れ渡る定めであるように、最後には救いたまえ。呪われた者の魂を。

主人を呼ぶ召し使いの声。「旦那様、旦那様。用意が整いました。お出かけの時間でございます」親方から授けられた斧を持ちロンヴァルいく。アンリは思索している。

山田浅右衛門御試御承り 八代將軍吉宗の頃 (1823年ぐらい)

將軍吉宗の前で女たちが華やかに舞う中「試し斬り」の用意がされる。つまりは屍体が、仰向けに横たえられる。本来であれば、土壇場という土が盛って作られた二つの小山に、頭の方と足の方を乗せる。屍体に頭、つまり首から上はない。山田浅右衛門とその弟子たちが準備を進めている。

吉宗
側近 (女たちの踊りに) あっぱれ、あっぱれ。
(將軍に促され) さようでございます、さようでございます。

と、以下の口上の間に、刀が運び込まれ、浅右衛門に渡される。屍体を試し切りする際の斬りどころを示した図なども掲げられる。

口上
たびたびのお目見え、恐悦至極でございます。

装いをば変えさせていただいてのお目通りで。
先の一場、フランスはパリーの1693年、あそこから100年てえ時代が経ちますと、あのフランス革命が起ころうか、そういうご時勢のお話で。
こちらでいやあ、家康公が幕府をお開きになって、これまた100年。戦国の世から、江戸という国の姿

が次第にくっきりと見えてきた時代でございます。
ええ、そこからざっと30年ほどすっ飛びます。長い芝居は嫌われるんで。
あれにおわすは八代將軍吉宗。こちらに控えしは山田浅右衛門吉時。
後々「首斬り浅」なんて通り名で呼ばれる事になります山田浅右衛門、その二代目吉時。
將軍家仰せつかりの事。

浅右衛門、刀を抜き、鑑定をする。

吉時 業物と見ました。今日は二つ胴にて、お試し致します。

屍体が二つ重ねられる。吉時、刀を振り下ろすと、見事、屍体はまっぶたつ。

吉宗 あっばれ。

皆々 さようでございます。さようでございます。さようでございます。

刀をふき、鞘に納める。

吉時 お刀。まさに最上大業物と見ました。

將軍、その刀に駆けより、手にしようとするが、皆に、押しとどめられる。

側近 不浄の物でございますれば。お清めの後に。

吉宗 山田浅右衛門吉時、見事であった。これより將軍家、御佩刀御試御用を仰せ付ける。

吉時
はは。

將軍一同去る。浅右衛門残る。

口上

というわけで、生まれましたる山田家の生業。が、召し抱えられたというわけでなく、將軍家の御用を務めながら町奉行配下の浪人の身でお役目をつとめる事に相成りますのは、やはり不浄の仕事だからかどうなのかは、歴史上はつきりとは致しやせん。ともかく、刀は人を斬る道具。ってことは……。戦のない世の中。そんなじゃそらで試し斬りってわけにもいかなかった。ちよいと思案をめぐらせりや、これしかない。(と先ほどの屍体を示し) そんじゃあ、こいつを作るには、どうするか。そう。

男が一人、刀を振った。

口上

山田家の生業にもう一つの仕事加わった。
元治(げんじ)二年慶応元年、数えて七代目山田浅右衛門吉利。
江戸。

首斬り浅右衛門宅。

吉時が吉利に成り代わった。

山田浅右衛門宅 道場そして仏間 元治二年慶応元年 (1864年レ・ミゼラブルが書かれた頃)

山田浅右衛門吉利（51）が、刀を振った。試し斬りのための訓練である。畳を二枚たて、その間をまっすぐに刀を振り下ろす。

吉利 二つ胴ならば、腹部の中程に刀を振り下ろす。骨がない故、刀の身が入りやすい。吉亮。
吉亮 はい。父上。

いつのまにか、吉亮（15）がいる。吉亮が刀を構え、振り下ろす。

吉利 斬れたか。
吉亮 いえ。わかりませぬ。
吉利 おのれで斬れたかわからぬ時は、斬れぬもの。斬れる時は、しかと手応えを感じるものだ。
吉亮 このように試し斬りの亡骸がない、稽古でもございますか。
吉利 そうだ。

吉亮、再度、刀を振る。

吉利 二つの胴を断切るには、いかに業物といえ、まっすぐに刀身を振り下ろさねばならぬ。吉亮は、右手の力が強い故、刀がわずかに左に傾く。

吉亮 精進しとうございます。
吉利 うむ。軒先から下がる蜘蛛を思い浮かべよ。
吉亮 あの蜘蛛でございますか。スーと下りてくる。
吉利 蜘蛛の糸のごとく、刀を振り下ろすのだ。

吉亮 （刀を構え）軒の蜘蛛・・・スーと（振り下ろす。手応えがあったか）父上。

吉利 日々、続けるがよい。
吉亮 さすれば……

吉亮が初めて、人を斬った日の出来事が浮かぶ。

牢役人 野州無宿、平助、死罪を申しつくるものなり。
平助 おありがとうございます。

門人 若先生。
平助は抑えられ首を差し出す。吉亮、刀を振り上げるが、止まる。傍らの手助け役の門人。
吉亮 えい。(と振り下ろす)

首が落ちない。平助は苦しむ。吉亮何度か試みる。が、

門人 お助け、ごめん。

首が落ちる。吉亮、しばし呆然とするが吐く。

門人 今日一日は食べ物が喉を通らないでしょう。
吉亮 ご、後藤さん……
門人 若先生だけじゃない。誰も初めての時は、そうなるのです。明日になれば……。大丈夫です。

と声。吉利の娘、吉亮の妹。おいさである。

いさ
失礼致します。吉豊兄さまが、後藤さんと長谷部さんと先に出立し、ご用意を整えておく旨、父上にお伝えしてくれとのことでございます。

吉亮
あ、兄上が先に・・・
吉利
うむ。もうそんな刻限か。仏間に参ってから、わしもいく。

仏間。 蠟燭が四つ。

吉利
(蠟燭を見て) 今日には四人であったか。

三人、涅槃経を唱える。

諸行無常 (しよぎようむじょう)
是生滅法 (せっしようめつぽう)
生滅滅已 (しようめつめついで)
寂滅為楽 (じやくめついらく)

読経は、これまで首を斬ったもの、そして今日これから命を奪うもの対してのものである。

吉亮
では。(と立とうとする)

吉利
吉亮。おまえは今日は、抜け番とする。死罪場に参るに及ばぬ。

吉亮
なぜでございますか、父上。

吉利
山田流は敵を斬る事に非ず。科人が瞬くうちに、首を落としてやる事は、
吉亮
はい。

吉利 斬首はひとたび間違えれば、苦しみを産む。

吉亮

吉利 四人なれば、わしと吉豊で充分。励め、吉亮。

吉亮 やはり、兄上がいらっしゃるから、わたしは……

吉利 首斬り浅右衛門だぞ。

吉亮

吉利 江戸の巷では、浅右衛門が首を一つ落とすたび、仏壇の蠟燭が端から一本ずつ消えていくと真顔で話して

いるそうだ。

いさ そんなお話が。

吉利 なんの。最後の一本が消えたとき、わしが家に帰ってくるそうだよ。 さて、今日はどちらから消えるの

いさ か。

いさ まあ、ご冗談を、お父様。

吉利 浪人という身ではあるが、御佩刀御試御用は立派な幕府のお役目だ。だが、人は首斬り浅と呼ぶ。おま

いさ えは……。

吉亮 わかりませぬ。わかりませぬが、先ほどの軒の蜘蛛。修行をしておりますと、この身が奥から、もっと極

いさ めたいという思いがわき上がってくるのでございます。

吉亮 お兄様は、浅右衛門のお名を継ぎたいのでございますね。

いさ いや、いさ。そうではない。そうではないのだ……

吉亮 なぜ、七代の間、山田家がこの御用をつとめて来られたのか。それは、剣の道に優れたものが、家督を継

いさ いだからだ。実の子に、才がなければ、養子を取った。わしのようにな。

吉亮 わたしには才など……

吉利 わしのほうがひどかった。

吉亮

吉利 しょんべんをもらしたからな。門人だったわしが、先代の養子に迎えていただいたのは、それから何年かたつてのことだった。励めよ、吉亮。

吉亮 はい。

吉利 さて。今日の試し斬りのお刀は。

吉亮 これに。

刀を吉利受け取る。

吉利 罪人は四人。試し切りも一刀なれば、それほど遅くはなるまいよ。蠟燭の消えた頃までには、戻ろうぞ。

いさ まあ、またご冗談を。

吉利 戻ったら吉豊たちに酒と肴を。

いさ 承知しております。

吉利 さやつらは朝までになろうぞ。たつぷりと用意してやれ。

いさ お父様もいつもご一緒ではありませぬか。

吉利 ・・・近頃は、さすがに眠くなる。

吉亮 酒で、血も憂さも流れましようか。

吉利 ・・・おのれを支えてくれるのは、おのれの覚悟と「技」だけよ。

吉利、行こうとする。

いさ 父上。今朝早く、勝様のお使いが参りました。

吉利 勝麟太郎殿か。

いさ 神戸からお戻りになられたとかで。

吉利 あの前もご立派になられた。勝様の父上と私の父上は試し斬りを競われたというが……。海軍奉行とは
ずいぶんご出世されたものよ。

いさ はい。坂本龍馬様や睦奥宗光様と国事についてお話しされてきたとか。
刀の鑑定のご依頼か。

いさ はい。その後一献かわしたいと父上にお伝えしてほしいと。

吉利 ……珍しきお人よ。

いさ・吉亮 ……。

吉利 明日にでも伺おう。使いを出しておいてくれ。

吉亮 それならば、わたくしが参ります。

吉利 うん。(行こうとするが、ふと) 刀を振り上げたら、うなじを見てはならぬ。あごと肩先の隙間を切り落とすのだ。

吉利、行く。

いさ では、お出かけのご用意を。

吉亮 いさは怖くはないか。

いさ ……。

吉亮 この部屋にいて、そしてこの家の娘でいることが。世間からは……
いさ さあ。生まれた時から、この家しか知りませぬ。
吉亮 そうか、そうだな。

吉亮、刀を構える。

吉亮 斬れる。

振り下ろす。蝋燭が消える。

死刑囚と刑務官1 出会い 現代

暗闇の中、四方から「点検、点検、点検」の声。やがて看守、今の言い方で言えば刑務官が。
「6号室点呼」「24番オノダノブオ」「よし」「7号室点呼」「19番キムラヨシオ」「よし」
「8号室点呼」「3番・・・」「おい・・・」「どうした自分の名前も忘れたか。返事がなければ・・・」「3番タカハシカツヤ」「よし」

若い刑務官、オヤマダタダシ。ベテランの刑務官モトミヤ。拘留所。独居房が立ち並ぶ房舎。朝の点検点呼が行われている。11号室には、死刑囚ナガタがいる。

タダシ 11号室点呼。

ナガタ ……

タダシ 11号室点呼。

タダシ (モトミヤに促され) 聞こえんのか。11号室点呼。

ナガタ 新しく来た人だね。

タダシ あ、ああ。

モトミヤ (タダシに) 答えるな。

タダシ モトミヤさん、少しだけだよ。

モトミヤ ナガタ、私語厳禁。
タダシ いい教育してね、俺に。いい執行するために。
モトミヤ ナガタ。
ナガタ あ、どこ見てるの。
タダシ え。
ナガタ 見ちゃうんだってね、ここ。つい。(首の部分)
モトミヤ 11号室点呼。
タダシ 11号室点呼。
ナガタ (さえぎるように) 7番ナガタカツトシ。
モトミヤ よし。

タダシ、自分がしなければいけないかもしれないことを考えた。

パリ市民の声 人権宣言が発表された日のパリ 1789年 (天明の大飢饉の頃)

街が騒がしくにぎやかだ。口上役はラツパなど吹くとご機嫌だ
が・・・

口上 1789年。人権宣言が発表された日のパリ。

口上役は新聞売りにすり替わり「自由だよ 平等だよ 博愛だ
と石鯨屋が現れる。石鯨屋は新聞を買っている。

よ」 酒に酔ったパン屋

新聞売りまいど。

石鱈屋　なんだ？

新聞売りえ？

石鱈屋　自由、平等、博愛って、なんだ？

新聞売り　わかるわけねえだろ。じゃあね。(と去る)

パン屋　わからねえなあ。わからねえ。

石鱈屋　たしかにわからねえなあ。

パン屋　わからねえ。あいつはどんなふうを考えているんだろうなあ。

石鱈屋　ん？何がわからないってんだ、パン屋。あいつって誰なんだパン屋。

パン屋　わからねえ。

石鱈屋　俺もわからね。だからよ、さっさともう一杯飲みに行こうぜ。今度は俺がパリで一番赤葡萄酒がうま

い店に案内するぜ。

パン屋　うるせえぞ。石鱈屋。その石鱈臭い顔を近づけるな。

石鱈屋　なんだと、おめえこそ、パン臭いじゃねえか。ん、いい匂いだ。

パン屋　それだよ、石鱈屋。

石鱈屋　ど、どれだ。

パン屋　つまりはこういうことだ。俺がパンを焼く。店に並べる。ぷーんとい匂いがする。俺はパン屋だ

て思うんだ。

石鱈屋　・・・。当たり前じゃねえか。

パン屋　だろ。おめえはどうだ。

石鱈屋　俺が石鱈を作る。市場に並べる。ぷーんとい匂いがする。俺はパン屋だ

パン屋　石鱈屋、馬鹿。

石鱈屋　つられちまったあ。

パン屋 さっきの店で聞いたろう。ええ、ええ、ええ。
石罅屋 なんだ、おい。
パン屋 今、思い出しているところだ。そうだ。わあ。
石罅屋 どうした。

シャルル・アンリ・サンソンがどこかに向かいながら何事か思案

していた。

パン屋 あれを見ろよ。

石罅屋 わあ。ありや、サンソンじゃねえか。シャルル・アンリ・サンソン。

パン屋・石罅屋 またの名を、ムツシュ・ド・パリ、四代目のサンソン。つまりは、

石罅屋 死刑執行人……

パン屋 (石罅屋の口を抑え) それだ。

石罅屋 どれだ。

パン屋 その名で呼ぶことはならねえと、国王様から触れが出たそうだ。ああ、思い出した。「有罪判決の執行

者」有罪判決の執行者、そう自分が呼ばれるように名乗り出たんだそうだ。ご本人様がよ。

石罅屋 なんて？

パン屋 なんてって、だから、それがわからねえってさっきから言ってるじゃ ねえか。

石罅屋 あ、そういうことか。なんで？

パン屋 だから、パン屋はパン屋で石罅屋は石罅屋で、(声を潜めて) 死刑執行人は、死刑執行人だろう。どうし

て名前を変えるんだ。いいか。俺が、ああと、粉からなんか作りしもの、とか呼ばれるか。

石罅屋 お、お。顔を奇麗にせしめるもの。

パン屋 で、あいつは、どうだ。自分のところに首が連れてこられる。それから、

石罅屋 首チョンパ。そんでもって、ぷーんと、うわあああ。おっかねえ。

パン屋 そうだ。するのは血の匂いだ。そいつは、俺からパンの匂いがして、おまえから石鯨の匂いがするのとおんなじくれえ、確かなことなんだぜ。有罪判決の執行者じゃ、調子が狂う。

石鯨屋 聞いてみりやいいじゃねえか。あもう、すいません。こいつがね……

パン屋 サンソンがいつの間にか近くにいる。
ば、馬鹿。忘れたのか。無闇やたらにこいつに触れたら、俺たちは名誉を失い、組合から除名されるんだぞ。

石鯨屋 いけねえ。そうだった。

サンソン、道をあけている。

アンリ お通りください。

石鯨屋 へい。じゃあごめんなすって。

パン屋 いや、むこうだろ、次の店。

石鯨屋 だって、通ってみてえじゃねえか。あけてくれてんだから。

パン屋 そりゃ、そういう決まりだからだろ。死刑し、(言い直して)「有罪判決の執行者」は、市民に道をあけるってのはよ。

アンリ どうぞ。

と、そこに、パン屋と石鯨屋の女房登場。

パン屋の女房 ああ、やっぱり。こんなところにいやがったよ。

石鯨屋の女房 赤い顔してき。なにをしてるんだか。

パン屋 お祝いだよ。お祝い。

パン屋・石鱈屋の女房　　はあ？

パン屋　ほら、なんとか宣言つてのが出たらしいじゃねえか。

石鱈屋　めでてえなあ。

パン屋・石鱈屋　なんとか宣言なんとか宣言ばんざーいばんざーい。

石鱈屋の女房　人権宣言だろ。

パン屋　それだ。

石鱈屋　こりゃ驚いた。おめえがそんな事を知ってるとは。

石鱈屋の女房　そりゃ、あたしだって、それくらい。

石鱈屋　で、なんだ？

石鱈屋の女房　え。

石鱈屋　だから、人権宣言つて・・・、なんだ？

石鱈屋の女房　・・・知らないわよ。

パン屋の女房　知らない。

パン屋　知らねえ。

石鱈屋　だから、知らねえ。あ、ここに書いてあんだ。

と新聞。みな覗き込むが、みな字は読めない。

石鱈屋の女房　買うんじゃないよ。字も読めないのに。

石鱈屋　自由だより、平等だより、博愛だより。

皆　・・・。

パン屋　とにかくお祝いだろう。

パン屋の女房　何のお祝いさ。おまえさんだろ、頭がお祝いなのは。

石罅屋 うまい事言うな。

石罅屋の女房 さあ、帰って働きな。(と亭主の耳をつかむ) 顔を石罅で洗って ね。

パン屋 そりや、いいや。(女房に) おめえもそのツラ、石罅で洗ったらどうだ。ちつとは奇麗になるかもしれねえ。

石罅屋 まいどうも。

パン屋・石罅屋の女房 馬鹿。

石罅屋の女房 あら。サンソンよ。

パン屋の女房 ほんとに。

いったんは姿を消したサンソンが再びやってきていた。

パン屋 なんておまえらポーとしてんだ。

石罅屋 たしかに目の形が変わってらあ。

石罅屋の女房 いい男じゃないかい。あたしの眼がいつもしよーもない男を見て曇っているんでなければ。

パン屋の女房 ほんとにねえ。石罅が目に入った痛みで閉じているのでなければ。

石罅屋 おまえら目がつぶれるぞ。

パン屋 それだけじゃねえ。あそこがくさつちまう。

パン屋の女房 何を言ってるんだい。サンソンと床を一緒にしたら梅毒が治るって知らないのかい。

パン屋 なんだって。おまえは、梅毒なのか。

パン屋の女房 わたしが梅毒ならおまえさんもそうなのかい。

パン屋 あ、そりやそうだ。ちげえねえや。

石罅屋の女房 あんた、サンソンに言っつて、泥棒の親指をもらって来なよ。品物の裏におけば商売繁盛間違いない無しつて言うじゃないか。

石罅屋 ああ、そうだな。

パン屋 そうなりや、小麦粉にまぜものをしなくていいかもしれねえな。
パン屋の女房 そうだよ。

一同近づぐが、アンリににらまれ、すくみ上がる。

アンリ 私が、こちらの道を行きましょう。

パン屋 どちらへ行きなさる。

アンリ トリアノン。

パン屋の女房 なんだって。

アンリ ヴェルサイユ宮殿で、ルイ16世国王陛下にお目通りを。

石鹸屋 なんだ？

アンリ行く。

パン屋 世の中、ひっくり返っちまうんだなあ。あのサンソンが王宮に行こう とは。

石鹸屋 (うなずきながら) なんだ？

パン屋 やっぱりわからねえ。わからねえ。ぷーんと来たら、何を考えるんだろうなあ。

と考えるがわからず、男たち、飲み屋に向かう。追いかける女たち。

トリアノン 革命前夜のフランスは。パリの王宮(前場)に続き(

アンリ なんとという者たちだ。すっかり到着が遅れてしまった。が、お忙しい方で逆に頃合いは良かったようだ。さて、王を待つ間に何をしよう……。ああ、これより王とお会いするのだ……。いや、恐れるな。わたしは王の名の下に有罪な者に与えられた刑を執行するだけの者なのだから。そうだ。医術の研究を進めることを思い描くのだ。幸いにして、屍体の権利は、我が手にある。人の体が、どの部分が何に拗って苦痛を引き起こし、死に至らしめるか、それと同じに、いかにすれば、人は痛みを減じ、生きながらえる事が出来るのか。そうだ。先ほどのような者たちからは、わざわざ治療のための金銭を取るまでもない。金持ちだけから取れば良い。そうだ、そうすれば、普段は道で私を避け、わたしの渡すお金に息を吹きかけてから受け取らねば名誉が失われるなどという商人も、夜になればわざわざ我が門を叩くだろう。同じ人間がだ。

いつのまにか錠前をいじりながら男が来ている。ルイ16世。

アンリ ん？ わたしは、ここで国王陛下をお待ちしている。そなたは。

ルイ 私の趣味が錠前いじりなのを知っているだろう。

アンリ ええ？ ああ、あなたは……

ルイ どうしてだかわかるかい。

アンリ へ、陛下が錠前いじりが、お好きな理由ですか。いえ、一向に。

ルイ 錠前は、なかなかあかないほうがいい。しかし、必ずあかなければならないから。

アンリ はあ。たしかに。

ルイ はっきりしている。そこが好きだ。だが、（錠前をかざし）鍵がない。

アンリ はっ。

ルイ 近頃は、はっきりとしないことが多過ぎる。未払分の支払に関する要望書を出しましたね。

アンリ は、はい。この二年というものの、国からの支払が滞っております。曾祖父の時代は、商人と市場から税を

ルイ 徴収する権利を頂いておりましたが、今は、国王陛下から頂く定めになっております。
国の金庫は、今、ほとんど空っぽです。アメリカとの戦争にお金がかかりすぎる。

アンリ 私どもの事情について、敬愛なる国王陛下にお話をさせていただきたく・・・
いや、わかっています。戦争も処刑もお金がかかるということでしょう。滞りのない支払を命じておきま

アンリ したが、あなたの要望の額はかなり大きい。三ヶ月の間、あなたにいかなる者もいかなる場合も支払の
請求をしないよう、命令書を出しましょう。
は、はい。

王が命令書にサインをする。

ルイ 罪はなにに拠るのだろうか。

アンリ 法に拠るかと思われず。

ルイ 法はなにに拠るのだろうか。

アンリ 国王陛下の御心に。

ルイ 私の心は何に拠るのか。

アンリ 神に。

ルイ とすれば、はっきりしている。

アンリ はあ？

ルイ 彼らはおそらく、壊そうとしているのだな。三部会が開かれ、人権宣言なるものが出され、議会が開かれ
る。アメリカでは、王ではなく大統領が選ばれた。彼らは彼らの手で法を作ろうとしているのだな。私
にかわり、神にかわり。市民の名の下に。

アンリ そのような・・・わたくしには、よくわかりませぬ。

ルイ わたしははずれ錠前をいじる自由さえ脅かされるのでしょうかね。

アンリ わたくしは、市民の範疇の外にあるものですし・・・
ルイ いつもわたしのためにありがとう。

アンリ おお。国王陛下、わたしはあなたの民です。あなたの手足として命じられるままに。
ルイ もし、彼らが、例えば、命じたら、どうするつもりか。

アンリ 命じる？
ルイ あなたが命じられることは一つでしょう。有罪判決の執行者として。

アンリは、王が自分を執行せよと言われたら、どうするか問うている事に気がつく。

アンリ わたしは・・・、思いもよらぬご質問で、わたしは・・・
ルイ はっきりとはしないか。市民はどうはっきりさせるのか、新たな法の 担い手として。

ルイ、証書を床に投げ、錠前をいじりながら去る。アンリ、証書をひざまずき拾う。

アンリ 恐ろしい。神の言葉。その代理である国王の命。わたしを生かしてきた、足下の大地が崩れてしまう事があるというのだろうか。

アンリ佇む中、「軒の蜘蛛」の修練を続ける吉亮の姿が浮かぶ。

吉亮 今、切っ先に確かな手応えが。出来た。

吉利 うん。

吉亮 父上。

吉利 出来たな。精進しろ。

アンリ 有罪判決の執行者が命じられることは一つ……。死刑執行人よ、お前の名前が死刑執行人でないなら、なんなのか。

ギロチン（前場から数日後）

フランスの国会。

議長 静粛に。静粛に。立憲議会を開催致します。それではギョテューヌ議員。

ギョテューヌ 人権宣言の名において、人は生まれながらにして自由であり、法の前では平等であります。この精神が発揮されるならば、死刑においても人は平等でなくてはなりません。貴族と平民も男も女も大人も子どもも同じ処刑の方法で行われる事はもちろん、最も大切なのは、死刑囚に無益な苦痛を与えることなく、迅速、かつ確実に死刑に至らしめる処刑であります。すなわち、器械による首の切断が、最良の方法であります。

どよめく。ギロチンの模型が取り出される。

ギョテューヌ 私のこの器械を持ってすれば、瞬く間にここにおられる皆さんの首を切断する事も可能であります。しかも、いかなる苦痛も感じる事はなく、首筋が、ほんのちよっぴり、ヒヤツとするだけであります。

議場に、笑いが起きる。

ギョテューヌ 本当であります。ヒヤツとだけです。

更に笑い。ルイ、別空間に現れ、

ルイ

うん。実ははっきりしている。それは何ものも入り込む余地のない、執行のための器械です。これならば、さらに命じるもののための執行が容易になるに違いない。刃の角度は斜めにしたほうが様々な首に対応可能では。専門家に意見を聞いてみたらどうです。

アンリ

まったく正しいかと思われませう。

ルイ

ほら。はっきりした。

アンリ

わたくしもこの器械を作るために協力いたします。(独白)素晴らしい。いかなる苦痛もなく迅速に、確実に死が訪れるこの器械を用い、誰に命じられるのであれ、この胸の内を覆い隠す黒雲が晴れ渡るのであれ

口上

口上

まさにフランスはパリで革命の年であります。これよりのサンソン一族の運命やいかに。

とご興味を持たれた方もいらっしゃるでしょう。が、ひとまず。死刑執行人の手による執行の方法は、

古代より、

追放、

石打、

断崖からの突き落とし、

車裂き、

四つ裂き、
切り刻みに磔、
火炙り、

斬首に吊るし首、多々ございますれども、
時を経るとともに、その残酷さを、国家が薄れさせていく傾向にあることは、間違いないきことのようにございます。

なんで？

アンタツチャブルなものは密航し、その本質が隠されるのでございます。
では？

フランスの処刑革命とでもいうべきギロチンの発明に遅れる事、七十と六年。
彼の国におきまして、王政復古のかけ声がわき上がった。

明治と元号が代わり、二年後。

山田浅右衛門宅。

吉利と

勝海舟。

勝海舟と浅右衛門 試し斬り禁止令 明治二年（1869年 アンリの死後29年）

山田浅右衛門宅。勝麟太郎・海舟と山田浅右衛門吉利が酒を飲んでいる。いさが世話をして
いる。

吉利 「打ちつくる」
海舟 うちつくる。

吉利 「太刀は柳の枝なれや」
海舟 太刀は柳の枝なれや。

吉利 「末におもりのあるとしるべし」
海舟 末におもりのあるとしるべし。

吉利 薄皮一枚残して、抱き首に斬り落とす。力で落とすんじゃねえ。腕の冴えに任せて落とすんだ。膝で己の首を抱く。そうしねえと・・・

海舟 どうなるのさ。いや、俺は親父と違ってよ、こっち(剣術)じゃなくて、こっち(学問)のほうだからよ。為損じて、後ろに跳ね返ったら、・・・斬り役が血を浴びる。首の皮一枚を残すんだよ、勝さん、わかるかい。

海舟 ああ。

いさ 勝様。お一つ、どうぞ。
吉利 いさ。(と杯を)

吉利は酔っている。いささか酔いすぎている。

吉利 斬った・・・。吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎・・・
海舟 安政の大獄。あんたは大活躍だった。

吉利 松陰は立派な男だったよ。死に際を見ればわかる。だが、わしは斬った。いさ。(とまた酒を)わしは、ただ斬っただけさ。
海舟 そうだな。

吉利

海舟

吉利

海舟

吉利

海舟

吉利

海舟

吉利

海舟

いさ

吉利

海舟

吉利

海舟

吉利

海舟

吉利

海舟

吉利

海舟

吉利

海舟

・ ・ ・ 悔いなどないと思っていた。思っていた。

悔い、とは違うな。なあ、勝さん。ざわざわしたものが近頃やまなくなったのさ。真っ黒い雲みたいなものが胸んなかに広がってどうしようもねえ。だから、やめたのかい。

・ ・ ・

明治政府から正式に首斬り役に任命されて、まだ半年も経っちゃいねえ。吉豊、吉亮とおめえさんをまとめて押し込むにやあ、俺だって口添えしたんだぜ。

勝さん、あんたはやっぱり変ってる。

好きなんだよ、俺は。あんたたちみたいなのが。

ご一新のとき、これからどうなるのか、山田家はなくなってしまわないか、心配したものでございます。

だが、家業はなくなった。ご佩刀御試御用承り浅右衛門の名も。

將軍家がなくなったんだ。刀を試すどころじゃねえさ。

残ったのは、首斬り役だ。

だが、あんたは斬った。明治元年から二年。

言われるままに。

何人斬った。

さあ、息子たちと併せれば、三百は超えようか。

じゃあ、いいじゃねえか。その腕を見込まれて、東京府囚獄掛斬役で正式なお役がついたんだ。

我慢がならなかったんだよ。ただただ斬るために積み上げてきた、この山田の家が二百年。なくなっちゃ

うのは。二百年だよ。勝さん。だが・ ・ ・

だが、なんでえ。

吉利 わからなくなった。昨日までは勤王の志士を斬り、今日からは幕府に忠誠の人間を斬る。正式なお役を頂いて、その給金で首を落とす。今まで、何とも思わなかったことが、なんだか、わからなくなったのさ。
・・・。

吉利 「なぜ死罪だ、なぜ俺の首を落とす？」 問われて「応えられぬ。応えることは役目ではない」 そう思ってきたことが、にわかにならついてきた。そうになったら、胸の内がざわざしてとまらぬ。なんのため
の修行だったのか。

海舟 それで、吉豊に家督を譲って隠居かい。

吉利 ああ。

いさ 勝手です。

吉利 吉亮兄様は、今、このときにも道場におります。

いさ。 出て行く。

吉利

・・・
国ってものができたんだ。前の時代のは、そのままってわけにはいかねえ。だが、だれでも飯は食っ

ていかなきゃいけねえさ。幕府の奉行だった俺が、今じゃ明治政府の役人で、部下に丸投げして判子を
押すだけみてえな仕事をしてる。吉利さん。どこかで生き恥だと思ってるよ。だが、一つだけ。これは俺
にしかできねえと思ってる事があるんだよ。一橋慶喜公とはずいぶんもめたが、このままじゃいけねえ。
徳川家がなくなったままじゃいけねえ。こいつを復興させて明治天皇にご謁見頂く、それが俺の仕事さ、
そう思ってる。

吉利

・・・
なんでえ、ぼうっとしやがって。

吉亮、続いて、いさが来る。

吉亮 勝様、おいでも知らずに失礼致しました。

海舟 おお、吉亮。勤めはどうだ。

吉亮 兄、吉豊を助け、励んでおります。

海舟 そうか。吉豊は、家督を継いで、家を構えたのだったな。

吉亮 はい。りく姉様と平河町におります。

いさ でも、近頃では、吉豊兄様に代わり、吉亮兄様が。

海舟 ん、なんでえ、吉豊がどうしかしたのかい？

いさ お体の調子が悪く、お役目の方はお休みを。

吉利 …… なに、吉亮がおる。腕を上げた。わしの出る幕はない。

吉亮 いえ。まだまだ未熟でございます。

吉利 励めよ。

海舟 じゃ、奴にはおめえさん方から伝えてくれ。話があるんだ。

いさ では、わたくしは。

海舟 いや、いさ、おめえもいたほうがいいかもしれねえ。

吉亮 なんとございましょう。

海舟 近々お沙汰があるが、その前にとっと思ってな。試し斬りは正式に禁止になる。

いさ ええ？

海舟 遺体は腑分けに回され、医術の発展の為に使われるそうだ。

吉亮 私は納得しませぬ。

吉利 ……

海舟 仕方あんめえよ。これも時世時節さ。
 吉亮 わたしは試し斬りが好きでした。わたしの磨いた力が、刀に命を吹き込むようで……。おかしなことを
 いらしていませんか。
 吉亮 おかしくございません。
 海舟 うむ。
 吉亮 ・・・。それから、死罪は、いや死刑か。死刑に絞首刑が採用される事になりそうだ。
 絞首・・・
 海舟 フランスのギョティエ又ってのかエゲレスの仕掛けか、もめたらしいが・・・
 吉亮 仕掛け・・・、器械で人を殺めるのですか。
 海舟 「残酷ノ事ニ候間」 斬首は残酷だ、ご一新の世には、残酷じゃねえ 刑罰が必要、そう政府は考えてる。
 吉亮 残酷・・・そう、思われるのか。山田家の二百年は残酷の営みだと・・・
 吉亮 我らの修行を、馬鹿にしている。我らは仕掛けとは違う・・・
 海舟 武士の世の中じゃなくなった。刀で斬るなんてことはなくしちまいたんだよ。
 皆 ・・・
 いさ 残酷だからこそではありませぬか。このわたしたちの有り様は。残酷だからこそ、それを・・・
 海舟 いさ。嫁に行くか。
 いさ え。
 海舟 嫁にいけよ。きっとその方がいい。
 いさ ・・・わかりませぬ。
 海舟 だが、当分の間、死刑は絞首と斬首、併せて執行されるってことになるだろう。
 いさ どういうことでございますか。
 海舟 侍つてもんを跡形もなく消すには、もう少し、残酷、が必要なんだろうな。おい、吉亮、おまえ来年から
 忙しくなるぞ。

吉亮 どういうことです。

海舟 もう政は京都じゃねえ、江戸、いや政府のあるここ東京で、名残の連中は仕掛けるしかなかったからさ。だが、もうこの流れは止まらねえ。

吉亮 そのものたちを、

海舟 ああ。首をさ、落としてもらいてえんだ。やるかい？

吉亮 わたしは・・・、斬ります。

海舟 うん。

いさ それから、どうなるんでしょうね。

海舟 なんだい。

いさ その残酷さが、必要なくなったら。

海舟 さあ。だが、そんな時世が来るのかねえ。

現代の絞首刑の踏み台が開く音が、それと知らず響く。

刑務官同士が話す

現代拘置所内のトイレ。あるものは手を洗うし、あるものは鏡を見るし、もちろん用も足す。後から入ってくる者もいる。ここが話が出る場所。ヘリコプターの音がする。

刑務官2 飛んでるねえ、最近。(ヘリ)

刑務官1 ああ？

刑務官2 オスプレイ？

刑務官3 低空飛行訓練のルートになったんですよ。最低高度はたった150メートルで、東京タワーの半分以下の高さなんですよ。

刑務官2 おまえ、よく知ってるね。

またヘリの音。

刑務官1 知ってた？

刑務官2 だから知らないよ。

刑務官1 そうじゃなくて。

刑務官2 なに。

刑務官1 仕事の事。

刑務官2 ・・だれも知らなかったんじゃないね。

刑務官1 だよな。

刑務官3 僕、呼び出されたとき、なんか表彰されるのかと思いました。

刑務官1 それはない。

刑務官2 でもさ、採用面接のときだって何も言われなかっただろ。

刑務官3 まずいんじゃないですかね。話し。

刑務官1 ・・ここならいいだろ。

刑務官2 あれさ、子どもが出来たとか言えばいいんだってさ。

刑務官1 そうなの！

刑務官2 おばさんが亡くなりそうだとかも。

刑務官3 断れるんですか。

刑務官2 次に回されるってことじゃね。

刑務官1 おばさん、何人もいたりして。ははは。

刑務官3 あの、書いてありましたよね。

刑務官1 なに。

刑務官3 パンフレットに。優しさと厳しさを持って、考え方・物の見方をアドバイスや悩み事に対する指導などを
をすするって。

刑務官2 ああ、見た、募集の。高校の先生が持ってきた奴な。

刑務官1 もしかすると、指導など、ってとこポイントだったかもな。

刑務官2 なんです？ 保安、警備の任に当たるってことじゃね？

刑務官1 頭悪いな。

刑務官2 いや、お前も悪いだろ。

刑務官1 そうだけどな。書いてあったよな。人と向き合う事で「まなぶ」

刑務官2 「はぐくむ」

刑務官3 「感動する」

刑務官1 「罪を犯した人間が私たちと同じ人間である事にかわりはありません、刑務官の仕事は教育です」

少し沈黙。

刑務官1 俺、別にいるんだと思ってたよ。死刑執行人てのが。

刑務官2 . . .

刑務官3 . . .

刑務官2 まあ、高卒で資格も必要なくて、大した試験でもなく、これだけ給料 もらえるんだから。

刑務官1 大企業よりちょっと下か。微妙。

刑務官2 年金もついてんだからな。あ、微妙って言えば、特別報奨金が二万 . . .

刑務官3 あの、公務員のなかで、刑務官が一番年金の受給年数が短いんですよ。
刑務官2 なんで？

刑務官3 さ、さあ。

刑務官1 拘置所に配属される刑務官は、10人に1人なんだってよ。

刑務官2 え。じゃあ、刑務官が全国で、えー、

刑務官3 17619人です。

刑務官1 1700人か。あたりを引く可能性があるのは。

刑務官3 運が良かったんですね。

刑務官1・2 悪かったんだよ。

刑務官4 (いつの間にか入ってきていて、三人の頭をこづく) 良かったんだよ。その中から24名から最大40人だけが特別配置に付くんだぜ。

刑務官2 張り切ってる奴がいるなあ。

刑務官3 あ、去年は8人執行されたから・・・

刑務官4 黙れよ・・・刑務官は、これやって一人前だろ。

刑務官1 説得力がない。小便しながらだと。

刑務官4 拘置所なんていったってさ、国民は何も知らないんだぜ。

刑務官1 どういうこと。

刑務官4 だから、刑務所と違って、死刑囚が執行まで収容されてる場所ってこと。

刑務官3 嘘。

刑務官4 ほら少し前の法務大臣が拘置所内部を公開しただろ。それまで、執行は絞首刑でだったのも、結構知らなかったらしいぜ。

刑務官3 電気椅子かなにかだと思ってたんですかね。

刑務官4 それじゃさ、誰が執行しているかなんて、関心ない奴がほとんどって納得じゃない。

刑務官5 (入ってきて) そういう無理解の中で、あえて俺たちが税金もらって生きている人間として、胸を張って職務を遂行する、それが一人前の刑務官たる責務であると。

刑務官4 急に来るなよ。

刑務官5 で、トイレで何してんの。

皆 なんにも。

間。

刑務官1 かわりにやるのにな・・・。

刑務官3 だって服務規程にはないんですよ。刑務官が死刑を執行するなんて。

刑務官5 ・ ・ ・ 宣誓してるしな。

刑務官1 そうだ。

刑務官2 ああ。

刑務官1 そうだ。何度もしたな。

刑務官4 そうだよ。

刑務官5 労働三法とかねえしな、俺たち。

刑務官2 警察とか自衛隊と一緒になんだよな。

刑務官3 ・ ・ ・ 「私は国民全体の奉仕者として公共の利益のために勤務すべき責務を深く自覚し、日本国憲法を遵守し、並びに、法令及び上司の職務上の命令に従い、不偏不党かつ公正に職務の遂行にあたる事を固く誓います」

皆も、途中からぶつぶつ呟く。

「大」からオヤマダが出てくる。皆、止まる。

刑務官1 死刑囚でさ、貧乏な家の連中が多いんだよな。

刑務官2 なんで？

刑務官3 弁護士が雇えないから。

刑務官4 裁判でうまくしゃべれねえんだろ。学がないから。頭よけりや、申し訳ない事をしたってうまくしゃべれるじゃん。

刑務官2 で、刑務官が教育するのか。

刑務官5 あいつらを刑務官が教育して矯正させて、立派な・・・

刑務官4 あれ。矛盾してね。教育して、それから・・・。なに、考えてんだろうな。

刑務官2 ・ ・ ・ なんで。

刑務官4 いや、おれ。

間

刑務官1 あいつら人殺したんだろ。

刑務官2 うん。

刑務官3 うん。

刑務官4 うん。

刑務官5 うん。

皆、タダシをみる。

タダシ ああ。

刑務官5 俺たち、人間矛盾解消機だ。器械か。

へりの音激しく。

先輩刑務官とオヤマダ 現代

拘置所の裏庭。オヤマダタダシがいる。モトミヤが来る。

モトミヤ こんなどころへ来るんだ。

オヤマダ、立ち上がり、頭を下げるが、モトミヤ、いい、いい、というように手を振り、煙草を取り出す。

モトミヤ 俺ぐらいかと思っていたが・・・(煙草を吸おうとし) あ、駄目か。これ。タダシ どうぞ。

モトミヤ 秘密の場所だったんだよ。どこもうるさくなったからなあ。やめとこ。医者にはやめろやめろって言われてんだ。

煙草を、モトミヤしまった。

モトミヤ・・・オヤマダは、親父さんも刑務官だったってな。

タダシ はい・・・。

モトミヤ 勧められたのか。

タダシ いえ・・・。なんとなく、就職難で。
モトミヤ そうか。俺には息子はいないけど、娘が一人いてな。まあ、俺も息子がいても、勧めるかどうかかわらんけどな。

間。

モトミヤ ナガタとは、その後、どうだ。
タダシ はい。少し心を開いてくれるようになりました。
モトミヤ 最初の頃は、やられてたからなあ。
タダシ あの時、ご迷惑おかけしました。どこか似ているところがあって・・・
モトミヤ だけどな、深入りするなよ。
タダシ 申し訳ありません。
モトミヤ 辛くなることがある。
タダシ あ・・・、執行に立ち会われた事がありますか。
モトミヤ 聞くな。聞かないもんだ。
タダシ 申し訳ありません。

間。

モトミヤ・・・呼び出しがあったのか。
タダシ いえ、自分は。まだ。

間。

モトミヤ 勉強はしてるか。

タダシ え。

モトミヤ 昇級試験。

タダシ いえ。

モトミヤ うだつがあがらんぞ、それじゃ、俺みたいに。下っ端の看守のままだ。あ、今は刑務官か。

タダシ 自分は、あまり、そういう風に思えなくて。普通でいいんです。

モトミヤ 気楽だからな。それに現場なら、収容者の数だけ知らねえ奴の人生っていうのかなあ、そういうのに出会える。

タダシ はい。

モトミヤ 子どもは。

タダシ いえ、いません。

モトミヤ 作らないようにしているのか。

タダシ え。

モトミヤ いや、いい。

タダシ はい……。

モトミヤ いい仕事かもしれん。あれがなけりゃ。

タダシ ……。

モトミヤ 音がするんだ。

タダシ え。

モトミヤ 昔は、でっかい鉄の板を思い切りコンクリの床に叩きつけたみたいな……。

タダシ ……。

モトミヤ 今はバタンコも電動だからそんな音はしないが……。なんだか貯め込んでいた全部の空気が漏れていく……。

タダシ バタンコ。

モトミヤ 足下がばたんとあくからバタンコだろうな。

タダシ ボタンを押すと聞きました。

モトミヤ 赤いボタンが三つ。どれがつかっているかは、つなげた幹部にしかわからない。

タダシ 三つ。

モトミヤ だから、確率は自分じゃない方が高い。昔は一つだったらしいな。

タダシ 一人前になったと思いましたが。最初の時、ああ、これで自分は一人前になったと思いましたが。

モトミヤ 終わった後な、所長の前で言うんだよ。「ありがとうございます。これで一人前に……」

タダシ どうして断らなかったんです。

モトミヤ オヤマダ。そんなこというなよ……。

タダシ はい。

モトミヤ 何回やってもなれねえもんだ……。なあ、扉を挟んであっちとこっちで、変わらない。同じだよ。

タダシ 同じ？

モトミヤ あいつらも俺たちも。俺はそう思ってる。

タダシ あの、モトミヤさん。

モトミヤ だから、出世しろよ。それですむんだ。でなけりゃ……、

タダシ え。

モトミヤ なにも出来ない人間は、このままだ。俺は……、いい。

モトミヤ、煙草に火をつける。どこかの基地から戦争のためにジェット機が飛び立ったのだらう。そういう音がする。

死刑囚と刑務官2 ロープ 現代

扉を挟んで、死刑囚と看守が向き合っている。オヤマダとナガタ。

房舎。

ナガタ 許される殺人ってあるんだな。

タダシ え。

ナガタ あ。勘違いしたでしょ。オヤマダさんたちの仕事じゃなくて、あっちの話。戦争とか。もちろん、俺がやった殺人でもなくてさ。

タダシ ああ。

ナガタ オヤマダさんは、正直な人だなあ。

タダシ ナガタ、どういうことだ。

ナガタ 「押し寄せてくる重圧と、職務を遂行する事が自己の人間性を傷つけたり喪失する事になるといった自覚（ここに差はあるにせよ）のはざまのなかで、体制のパーツとして安住するか、あるいは自己破壊かの選択をせまられ、人間として苦悩し（と信じたい）、揺れ動きながらも結果として、前者の生き方を選ぶ、選ばざるを得ないという現状」について考えているのがよくわかるから。

ナガタは拘置されている間に、こういう本を読んだのであろう。

タダシ ……よく、勉強してるな。

ナガタ 戦争ってさ、勝てばいいから、人を殺さなくたっていいんだってね。

タダシ え。

ナガタ 俺はさ、ほら、戦争って必ず人を殺さなきゃいけないんだと思ってたよ。

タダシ うん、そうじゃない場合もあるだろう。

ナガタ
タダシ
だけどき、オヤマダさんは違うよね。
・・・。

ナガタ
タダシ
出世すれば、しなくてすむんでしょ。

ナガタ
タダシ
俺は、現場にいてよかったと思ってる。

ナガタ
タダシ
現場。

ナガタ
タダシ
・・・。

ナガタ
タダシ
俺も、ここに来てよかったよ。

ナガタ
タダシ
どんなことがだ。

ナガタ
タダシ
漢字が読み書きできるようになったでしょ。文庫本っていうのがあるの知らなかったから。

ナガタ
タダシ
家には本がなかったといっていたな。

ナガタ
タダシ
おふくろはカタカナしか書けなかったでしょ。あんなおふくろ死ねばいいと思ってたけど、親孝行になる

ナガタ
タダシ
でしょ。普通になったみたいで。

ナガタ
タダシ
俺も、ここに来てよかったと思ってる。俺は、人と話したり考えたりしたことが、あまりなかったから。

ナガタ
タダシ
そうか。

ナガタ
タダシ
ナガタとは、あまりたくさんのお話しは出来ないが、こうして話せる事　はいいと思ってる。

ナガタ
タダシ
普通になったんだ。

ナガタ
タダシ
ああ。ナガタ、おまえもだ。

ナガタ
タダシ
それでも天国は無理かな。普通になったくらいじゃ。

ナガタ
タダシ
そんなことはない。今のお前ならきつと。

ナガタ
タダシ
考えたんだけどね、もし天国に行くとしたら、綱をね、チョロ、チョロ、登っていくのかな。首にかか

ナガタ
タダシ
っているロープをね、蜘蛛が逆に登るみたいにな。

ナガタ
タダシ
（自分のいうことがどこかで馬鹿みたいだと感じながら）天国に昇る方法は知らないが、ナガタなら身が

ナガタ
タダシ
軽そうだし、早く登れるかもしれないな。

ナガタ 痛いんでしょ。苦しいんでしょ。

タダシ 痛みは感じないというぞ。

ナガタ どうしてわかるのかな、そんなこと。

タダシ ・・・そう言われてる。

ナガタ でも、そういうことは全部引き受けるから、俺。大丈夫だよ。他に遺族へのお詫びとか、出来ないし、そ

れで全部だから、俺の。死んだらそれで。

タダシ きっとわかってもらえる。

ナガタ それはわかんないけど。ほかにできないから。でも、悪いけど・・・

タダシ なんだ。

ナガタ 暴れるから、そんなとき。

タダシ え。

ナガタ そういう結論になんで達したか、わからないけどさ。ここにいて、ずっと勉強して考えたら、そうなんだ

よね。俺が、たとえば、オヤマダさんに殺されるってことには、抵抗しなきゃいけないんだよね。俺に

殺された人や遺族の人に罪を償うのはいいんだけど、やっぱり、殺されるってことには、俺の最後はもう

決まっていたって、抗っとなきゃいけないってさ。

ナガタ ・・・

オヤマダさんにあたったらさ、迷惑かけちゃうけどさ。

タダシ 俺は・・・

オヤマダ立ち尽くす。

パリの執行人の場合

アンリ 人よ、俺の前から去れ、逃げよ。

売春婦たちが現れる。

アンリ 逃げよ、今、わたしを惑わすこの場所から。

シャルル・アンリ・サンソンが酒を飲んでいる。

アンリ どこに。

女たちの唇を奪う。

アンリ どこでもよい。

抱く。

アンリ この狂乱の果てに。

狂おしい動きの中で。

アンリ 私と同じ黒雲のごとき苦悩を内に抱く、売春婦どもよ。我が身が放つ、血の香りをたっぷりと嗅ぐがい。

さらにアンリと売春婦たちは激しく交わるが、次第に、アンリいらだつ。

アンリ ……なぜ、畏れながら、俺にまとわりつく。俺に魔力などないのだぞ。だめだ、おまえたちでは。

売春婦たち、去る。仮面で顔を隠した貴婦人が現れる。

アンリ ほう。

貴婦人、アンリを誘う。

アンリ 高くつきますぞ。貴い方のお遊びは。

二人、交わる。

貴婦人 この腕が殺すのね……この耳が最後の言葉を聞き……この目が最後の姿を……
アンリ ……なぜ、そんなふうには、俺を見つめる……なぜ、そんなふうには、俺に触れる……

貴婦人は、いつのまにか、首輪をアンリにつけて引きずり回した。

貴婦人 変わってる。どう変わっているのか、あなたの中身をのぞいてみたい。

貴婦人はさらにアンリと交わろうとするがアンリは拒否した。

貴婦人 どういうこと。

アンリ なぜ、そんなことを言う。

貴婦人 え。

アンリ 俺は、変わってなどいない。俺を見る。まっすぐの眼で。

アンリ、貴婦人の仮面を外そうとする。

貴婦人 やめて・・・

仮面を外す。

アンリ どうだ。俺は、なにに見える。同じだろう。

貴婦人 あなたを訴えます。

アンリ 罪状は？

貴婦人 あなたが、死刑執行人であることそのもの。

アンリ 法の従う有罪判決の執行者ですぞ、わたしは。

貴婦人 手を洗わなきゃ。身体も、すべて。

貴婦人去る。

アンリ (独白) これは良い機会だ。

法廷。

裁判長　パリ高等法院は公爵夫人の訴えを受理する。

アンリ　私は、ここで市民となることを訴えよう。同じ市民に。わたしは自分で自分を弁護すればよい。

判事1　被告は、死刑執行人にあるにもかかわらず、その事を明確に公爵夫人に告げず、その手に触れ、関わりを持った。忌むべき職業の人間が、高貴な方とともにあるのは赦されぬ事である。

アンリ　私の罪とされているのは、不名誉で忌むべき者とされている役職についているということだけであります。しかし、判事の皆様におうかがいしたい。国家において不名誉で忌むべき職業などというものがあるでしょうか。

ギョテューヌ　法の前では全ての人間は平等で、ヒヤツとするだけであります。

笑い。

判事2　法が命じる事はすべて善である。死刑執行人はその法に従っているに過ぎない。それを法がその人物に「それをやりなさい。やり終わったらおまえは悪口を浴びせられるだろう」というのは間違いだ。

判事3　法が命じているというが、しかし法は人に対し、死刑執行人になるように命じているだろうか。

アンリ　軍隊を思い浮かべていただきたい。軍人の事を。彼らの仕事はなにかと問えば、私と同じように人を殺す事だと答えるでしょう。だからといって、一緒にいて名誉を汚されたと思う人間もおりません。しかも、私が殺すのは、犯罪人だけなのです。

ギョテューヌ　犯罪人が殺される時も、ヒヤツと・・・

皆に取り押しさえられる。

アンリ　もし、この職務に非難されるべきことがあるとすれば、それは皆様方の責任に帰せられるべきものであり

ましよう。法の精神によれば、犯罪を命じるものは、それを実行するより罪が多いとされており、法を作る方々。どうか命じてください。法の名の下において、身震いするような仕事を、市民を代表し、私が執行することを。

裁判長 処刑を命ずる者は、決して汝に恥辱をもたらすことはない。汝は義務と職業に従って行動するのだ。法廷はシャルル・アンリ・サンソンを無罪とし、その市民権を認める。

アンリ おお。

ギョテューヌ（離れた場所に現れて）皆様、いよいよギロチンが完成いたしました。多くの首が、より早く、確実に、簡単に、大量に、首がヒヤツとするだけで落とされることでしょう、市民の代表である、そのもの手によって。

アンリ わたしが市民……。この職業を我ら子孫に与えし、先祖の霊よ。見ているだろうか。わたしは、手にしたのだ。なんの呵責もない場所へ、いく、通行手形を。

刑務官と上司1 現代

拘留車内の一室。幹部である上司とオヤマダ。

タダシ はい。ナガタカツトシの心身状態は、・・・健全で異常ありません。

上司 では執行命令書に従い、すみやかにナガタカツトシの刑を執行します。オヤマダタダシ君には、明日土曜日午前8時30分から特別配置についてももらいます。事前に事が漏れないよう、万全の注意をしてください。もちろん家族にもね。

タダシ はい……。

上司

(執行命令書を見ながら) このハンコは誰が押してんだろうね。今度の法務大臣はバンバン執行命令出してくんねえ。あ、大丈夫なんだろうね。誰か身内が死にそうだとか。奥さん、妊娠してるとか。

タダシ

何もありません。

上司

別に構いやしないと思うがね、慣習だから、そういう。

タダシ

・・・

上司

緊張してるな。初めての時はみなそんな感じだな。小便漏らした奴が いたっていうから。きみもこれで

タダシ

一人前の刑務官だな。

タダシ

あの。

上司

なんですか。

タダシ

服務規程には、書かれていないと聞きました。

上司

あれ。聞かなかった事にしとくよ。

タダシ

しかし・・・

上司

あれね、やるのが当然だから書かれてないんだよ。そういう事含めて刑務官でしょ。

タダシ

刑務官の仕事は、受刑者の教育に、

上司

オヤマダ。それは刑務所の話しだろ。拘置所だよ、ここは。いるのは 死刑執行を待つやつばかりだ。警

タダシ

備と保安、逃がすな、自殺させるな、病気にするな、狂わせるな。それが仕事だ。

タダシ

せめて、ナガタの執行は外して・・・

上司

順番だから。

タダシ

・・・

上司

死刑囚処遇の鉄則。オヤマダ。

タダシ

いついかなる時でも死刑の執行ができるように死刑囚を管理監督することでありませぬ。

上司

最近、熱心に取り組んでいるらしいね。四人も殺しちゃったナガタの管理監督。少し規則に外れる事もあるみたいだけど

タダシ どうして。

上司 自殺とかされたらほんとに困っちゃうからさ、そのために教育してくれてるのはよくわかってるよ。
タダシ . . .

ヘリが飛んでいる。

上司 戦争にでもなったら、少しは良くなるのかな。ね。世の中、まだまだ 不況だからね。

タダシ . . . 自分はわかりません。

上司 奥さんも喜ぶんじゃないかな。特別査定がつくし、特別報酬もあるしね。あ、基地とか原発と一緒にだよ。
タダシ

上司 考える事ないよ。押せて言われたら押せばいいんだ。決めたの、俺たちじゃないんだから。

アンリの日記から

アンリは「日記」を書いている。

アンリ ギロチンが発明されて以来、私は市民の代表として刑を執行し続けている。市民が作る法律は次から次へと出来上がり、どんどん変えられている。死刑判決は毎日何十何百と出され、わたしはまるで民衆の敵討を請負っているようだ。手が足りなくなり、息子が仕事を手伝うようになった。私と息子は、まるで自分がギロチンになったように、すっかり無感覚になって事務的に務めを果たしている。ギロチンは一日何人も何人も殺せるからだ。だが、まるで追いつかない。そして、わたしは恐ろしい事に気がつき始めて

いる。それは今日、行われた処刑に関係している。

ギロチンがおかれている広場。国王、ルイ16世が横たえられてギロチンの刃が落ちるのを待っている。

アンリ 国王陛下、わたくしは、わたくしは……、どうか最後のお言葉を。

ルイ とうとうはつきりしたか。君は正しい。実際にはつきりとしている。わたしは、はつきりとしたものが好きだ。王は消える。わたしは理解している。……だが、なんだ、この胸の内のざわざわしたものはなんだ。はつきりしない。黒い雲のような……

ギロチンの刃が落ちる。

アンリ 王は、今、存在しなくなった。……この手で、この国の王だったものを。

ルイ16世の首がしゃべる。

ルイの首 そうだ。これがはつきりしていない。なぜだ。なぜ、わたしは錠前いじりをしてはいけないのだ。なぜ、私は殺されるのだ。

アンリ 王が姿を消した今、わたしは市民が作り出す法にただ従う。だが、恐ろしい。王の命は、神の言葉で、ここに間違いはない。いや、疑いを挟むことは許されぬ。疑わぬことが正義である。だが、私と同じ市民が作り出す法のすべてが、裁きのすべてが、善であり、間違いを犯さ ない、正義であるとなぜ言えよう。……。明日は二十二人の首を落とさなければならぬ。恐ろしい。国王の子は国王になる時代は終わった。だが執行人の息子は……。それならば、私の息子は、何に支えられギロチンの刃を落とすのか。

山田家の場合

浅右衛門宅、仏間。蝋燭が揺れている。

吉利 応えられぬ。応えることは役目ではない、

山田浅右衛門吉利が、一人、酒を飲んでいる。夢でうなされているようでもある。酒がない。

吉利 いさ。いさー。吉亮、吉亮ー。

返事がない。

吉利 だれもおらぬ。昼か夜か。

蝋燭の明かりが一つ消える。

吉利 斬っておるな。吉亮か……。まだ器械にとって代わられてはおらぬ わ。いさー、いさー。

吉利、なにかを発見した。他のものには、見えない。

吉利 おまえ……。吉豊ではないか。なにをしておる。平河町で病の療養中ではないのか……。なぜ答えぬ。

蝋燭が動き始める。

吉利　なぜ、そんな目でわしを見る。．．．なぜ刀を抜くのだ。

　　蝟燭が揺らめく。吉豊、刀を振ったらしい。

吉利　なんだ、その剣は。吉豊、おぬし、修練をやめたのか．．．。なぜだ．．．。そうか、わしを恨んでお
るのか。まもなく消えてなくなるもののため　　に、修練など出来はせぬというのか。

　　また蝟燭がゆれる。吉豊、刀を振ったらしい。

吉利　技を失えば、．．．。おのれを支えるものは、覚悟だけ。生きる場所を　失ったのか、吉豊。死にきたの
だな。

　　吉利、刀を抜く。

吉利　山田流は敵を斬る事に非ず。この世とあの世の橋渡し。

　　吉利、刀を構え、念仏を唱える。晩年の吉亮が、山田流の極意として語ったことによれば、
柄にかけた右手の人差し指を下ろす時「諸行無常」、中指を下ろす時「是生滅法」、無名指を
下ろす時「生滅滅已」、小指を下ろす時「寂滅為楽」と誦え、その途端、首が前に落ちると
いう。

吉利　諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅為楽

刀が振り下ろされた。吉利がぺたんと腰を落とした。
と、修練を続ける吉亮が浮かぶ。

吉亮 蜘蛛の糸。

吉亮、刀を振り下ろす。

吉利 すまぬ。

蝋燭がすべて消えた。

官舎1 アキコとタダシ 現代

死刑執行人たちの姿が浮かんだかと思うと、ヘリの音が遠ざかる。
暗闇の中。声がする。うめき声がする。暗闇に妻アキコの声。

アキコ ……起きて。……起きて。ねえ、起きて……起きなよ。

タダシが、目を覚ます。

アキコ タダシ。

タダシ アキコ……。

アキコ 明かり、つけるよ。
タダシ つけるな。
アキコ もう外、真っ暗だよ。
タダシ つけるな。

明かりつく。妻のアキコ。スーパーの袋を持っている。ここは拘置所と同じ敷地内ある官舎。

アキコ ただいま。スーパー行ってきた。便利になったよ、遅くまであいてて。お刺身とか買って来たから。(と台所に) 所長の奥さんと一緒になってね。急なお客さんで偉い人だから買い出したって。一緒に帰ってきたんだけど、もう気がつかっちゃって。官舎も大変だね。こっちまで階級社会だから。(戻りながら) ご飯食べる……。食べられないか。

タダシの頬に痣がある。

アキコ 痛い？ 薬つけといたんだけど。あと腕とかも傷だらけだった。
タダシ 何時だ。いや、何曜日だ。
アキコ 土曜日で、もう夜だよ。
タダシ まだ、今日か……。
アキコ 仕事、珍しく昼までだったんだね。
タダシ ・・・ああ。
アキコ 忠兵衛のマスターから電話あったよ。びっくりしてた。
タダシ 何か言ったのか、俺。
アキコ さあ。とにかく準備中から飲み始めて、後から来た知らないお客さんにおごって、とにかくあんなオヤマ

タダシ ださん、初めて見たって。

アキコ そうか・・・

タダシ ねえ、なにかあったの。

アキコ ・・・・

タダシ タダシが話がないなら、私はあるんだけど。

アキコ え。

タダシ ・・・・

アキコ なんだよ。

タダシ ・・・・ あ、ああー。忘れてた。忠兵衛のマスターにお金持って行くって言ったのに。

アキコ お金？

タダシ 払ってこなかったんだってよ。酔っぱらい過ぎ。・・・今から払いにいつてこようかな。

アキコ。財布を取りに行く。タダシ、ポケットを探る。くしゃくしゃの封筒。中には二万円。
アキコ、戻る。

アキコ じゃあ、・・・(と封筒とお金に気がつく)それ・・・。

タダシ なんでもない。なんでもない。

アキコ ああ、やっぱり。

タダシ え。

アキコ わたしも刑務官の娘だし。さっき奥さんも言ってたし。

タダシ アキコ。アキコ、これは。この金は・・・

アキコ 二万円なんだね、今は・・・。

タダシ え。

沈黙。

アキコ わたしのほうから、先に話す。

タダシ ああ。

アキコ タダシ、子どもできないようにしてた？

タダシ どうして、そんなこというんだ。

アキコ そういうことがあるから？（お金とそれにまつわる事）

タダシ え。

アキコ 言ったでしょ。私も刑務官の娘だから。知ってるよ。子どもにたたるとか、五体満足で生まれて来ないと

か・・・そういう話が、

違うんだ。

アキコ なに。

タダシ ・・・・子どもは親を選べない。

アキコ え・・・うん。

タダシ 親父は、何も言わなかったけど、だいたいわかってた。どんな仕事をしているかって。ひどく酔って帰っ

てきたから。外で全部使って飲んできたんだ。おんなじだ。

アキコ そうだね。

タダシ 帰ってくるとおふくろが殴られたりしてた。

アキコ それは、違うね。

タダシ 俺は絶対に看守になんかならない。ずっとそう思ってた。就職がなかなか決まらなくて、ある日、机の上

に青い封筒。刑務官募集のパンフレット。親父に突き返すと、「おまえなら大丈夫だ」

アキコ どうして、刑務官になったの。他の仕事に就いて刑務官の息子だって・・・

タダシ 実際、不況だったし・・・
アキコ 知られてなにか言われるの嫌だった？

タダシ ・・・・そうかもしれない。
アキコ わたしと結婚したのも？

タダシ え。それは違う、と思う。

アキコ 結構、うまくやってきたよね。わたしたち。
タダシ え。

アキコ わたしたち。わたしがそう思ってただけかもしれないけど・・・。

タダシ 俺は、ただ普通に暮らすとか、守りたかったんだ、そういうの。そうだ、俺は親父より、うまくやれるはずだ、って思ったんじゃないかな。

アキコ わたしもだよ。

タダシ でも、もし、そうだったら、そういうことをしたら、子どもなんて説明していいのか、わからない。親父がただ黙っていたようにやっぱり刑務官の息子は刑務官の息子だ・・・。

アキコ ・・・・わたし、ずっと基礎体温つけてたでしょ。

タダシ ああ。

アキコ つけ間違えてたの。

タダシ え。

アキコ 子ども、出来た。

タダシ アキコ。

アキコ どうする。

タダシ 今、どのくらい・・・

アキコ あなたが、この子の命を・・・、命がなくなってもいいなんて思う人じゃないことは、わたし、知ってる。
タダシ だめだ。

アキコ タダシ。
タダシ わかってたなんて・・・、俺は全然知らなかったんだ。知らなかったんだよ。ああいうことを親父がやってたなんて。

タダシの父親の姿が浮かぶ。青い封筒を差し出している。

アキコ お父さんはタダシになんでこの仕事につけていったんだろうね。

タダシ え。

アキコ いいよ。

タダシ え。

アキコ 話して。

タダシ アキコ。

アキコ わたしは聞くわ。うん。聞くから話して。

死刑の様子 現代

執行場。絞首用の白く太いロープ。赤い押しボタンがある。ナガタの獣のような雄叫びが響く。「確保、確保、確保、確保」の声。上司、逃げるように登場。ナガタにはね飛ばされた刑務官が転がってきた。顔は痣だらけで、足を引きずり、手に血がついている。

上司 確保。

刑務官2、3 はい。

刑務官2、3行く。警棒を手にしている。

上司 なにをしている、おまえらも行け。

刑場にいたモトミヤらにも行く。オヤマダ、「首抑え」を持ち出

している。

上司 行け。確保。

オヤマダ、行こうとすると刑務官の一人がまたはねとばされるが、獣のようになりまたナガタへ向かう。肉が打たれ、骨がつぶされるような音がする。その音が途切れる。

モトミヤ 確保しました。

上司 よし。執行準備。

モトミヤ はい。

足と手を縛られ、目隠しをされたナガタがぐったりとしたまま、連れてこられる。手はねじくれている。ナガタが「ボタンコ」の上に立った。

上司 配置に付け。

オヤマダが、他の刑務官とともに、赤いボタンの前に立った。

オヤマダ 配置に付きました。

上司 執行準備。

オヤマダらボタンに手をかける。

モトミヤ 最後の言葉は。

上司 いらん。

モトミヤ、首に素早くロープをかける。そのとき、ナガタが顔を上げた。

ナガタ おまえらは俺と同じ、人殺しだ。

上司 押せ。

赤いランプが点灯する。二人の刑務官がボタンを押す。だが、開かない。オヤマダが押ししていない。

モトミヤ 非常用ハンドル作動させます。

上司 (オヤマダに) 押せ。

オヤマダ、ボタンを押す。暗転。ボタンコが開く音が響く。奈落の底に落ちたロープが浮かび上がる。ロープは、その先のものの動きを示すように、右に左にねじれる、跳ね上がる。その動きも突然止まる。下から声が。「止めました」

上司 よし。

沈黙の時間。

医者の声 10時44分、執行終わりました。所要時間13分15秒。
上司 よし。5分間放置、観察。

ホツとしたため息が充満する。上司、封筒を床に投げる。オヤマダ、拾う。世界は再び闇に閉ざされていく。アキコが見ていた。

恐怖の季節を経てのサンソンの絶望

アンリがいる。

アンリ なんともやりきれないのは、死刑に関わる仕事が、まるでそれが永遠に続くかのように思われることだ。恐ろしい一日。ギロチンは今日一日で154人の人をむさぼり食った。私は力が尽きてほとんど息が出なかつた。

ギロチンが浮かぶ。

アンリ なにかが狂ってしまった。議会で採用されたギロチンは、死刑執行人には、無限の苦しみの季節を与えた。いや、元から狂っていたのかもしれない。

アンリ 今日の最初の処刑者は、あの少女だ。

少女が断頭台の上に横たえられる。

アンリ あの断頭台に横たわる少女を、見物のおまえたちは、見殺しにする気が。だれでもいからギロチン台に上

少女 がって来い。そして少女をどこかへ連れて行け、俺は邪魔はしない。誰か早くしてくれ。

アンリ これでいいのですか。死刑執行人さん。

なにかがわたしにギロチンを壊せと命じていたが、卑怯にもその声を 必死に押さえつけた。

ギロチンの刃が落ちる。

アンリ ひどく手がふるえ、めまいがして、もう家に帰りたかったが、あと一人だけだと我慢した。混ぜ物をした

パン屋。

パン屋がギロチン台の上に。

パン屋 わからねえなあ。わからねえ。なあ、あんた。俺を首チョンパしたら、どんなふうを考えるんだい。ねえ。

旦那。

パン屋の首が落ちた。

パン屋の女房 あんたー。

アンリ いったい、私は市民としてどこへ行く通行手形をもらったのだ？ 実は私は知っていたのではないか。こ

の胸の内がざわざわとゆらめくのは、真っ黒い雲が胸の内を覆いつくしているのは、私が市民でないか

らでなく、この仕事をしているからではないか。ただ、それだけだということ。もう出来ない。だが、

私がやめれば、息子がそれをやる。息子もやめればいい。だが、そうしたら、誰かが？ 永遠の地獄巡りに、私自身で終わりの印を付ける事は出来ぬのか。唐突だが曾祖父の時代から書き連ねられてきたこの死

刑執行人の日記も今日でやめようと思う。何事も続けるのは、一筋の希望の光が見える場合だけにすぎない。ああ、せめて、この首を断頭台の上におき、自分で自分の首を はねる事が出来たら。

消え行くアンリとともに、アキコとタダシが浮かんでいた。二人がやがて見つめる目線の先に、山田浅右衛門吉利。

浅右衛門の最後

小鳥の声が聞こえてくる。若い女が、足下のおぼつかない老人を支え、縁側に連れてきた。老人は吉利、若い女は後添えであろう。お腹が大きい。勝海舟が見ていた。

若い女 はい、これ。

若い女、吉利にエサ箱を渡す。吉利、小鳥にエサをやる。

海舟 似合わねえなあ。首斬り浅が、おっと。

若い女 もう生き物ならなんでも可愛がって。

海舟 へえ。

若い女 裏にはうさぎがいるし、それに、ネズミが増えて困りますよ。

海舟 ネズミ。

若い女 とうとうとすると、怒るから。

海舟 そうかい・・・

若い女 この人、ほんとに首斬り浅右衛門だったんですか。

海舟

・
・
・

吉亮来る。いさもいる。

海舟

よお。吉亮。

吉亮

勝さん。

海舟

聞いたよ。今日は親父さんに、挨拶かい。

吉亮

はい。

いさ

勝様。ご無沙汰しております。

海舟

なんでえ、出戻りか。せっかく、俺がいい男を見つけてやったのになあ。

いさ

勝様には、申し訳ない事をいたしました。

海舟

いや。俺の方こそ、すまなかったな。明治の時代になっても、いろいろ言う奴はいるもんだ。また、いいのを見つけどくよ。

いさ

もう懲り懲りでございます。

海舟

そうかい。

吉亮

父上。ご無沙汰しております。吉亮です。

吉亮

んん？

若い女

吉亮さんですよ。あなたのお子さん。

吉亮

昨日、「市ヶ谷監獄署書記」のお役を依願退職して参りました。

吉利

・
・

吉亮

ご報告をと思ひまして参上致しました。

吉利

・
・
・

海舟

最後は、いつだったっけな。

吉亮 昨年です。明治14年7月24日、強盗殺人犯の巖尾竹次郎・川口国蔵を。
海舟 正式な公布は昨日だったんだな。
吉亮 はい。斬首刑は禁止となりました。用済みです。

海舟、頭を下げた。若い女がぴくんとした。

若い女 あ、動いた。

命が跳ねたのである。

いさ ……子もよいものかもしれませぬね。

若い女 はいー。(軒先からさがる蜘蛛に気がつき) きゃ。嫌だ、蜘蛛。わたし 蜘蛛は…
若い女、蜘蛛を打とうとする。と、

吉利 打つな。

若い女 え。あ、はい。

吉利 おうおう、蜘蛛が登っていくわい。

皆、蜘蛛を見つめている。モトミヤ役の男が登場する。いつかのように、死刑囚の独房を廻っている。

口上 浅右衛門の時代は、こうして終わったけど、この年、定められた旧刑法には、死刑は押丁が執行すると定められた。

押丁は、看守の助手であり、屍体の取り片付けを行う、監獄内で最下層の役目だった。それから明治も終わりの42年には、この役目も廃止され、このダーティワークは、新しく最下層の役職とされた看守がその任を担う事になる。

この流れを汲む現在の刑法には、なぜか死刑執行を行うものの名はない。

だけど、看守が刑務官と名前を変えても、この慣習はそれからずっと、今に至るまで続いている。

月光 現代

モトミヤを演じた男をはじめ、これまでの登場人物たち、一座の面々が待っている。死刑を執行した日のタダシ、その話を聞いたアキコが登場する。アキコの話に登場する人物は周りの一座の面々が演じる。

アキコ わたしも話さなきゃいけないことを話すね。……。小学生が夜中に目を覚ますくらいだから、ずいぶんと

大きな声だったんだと思う。母親が、

母親 父ちゃん、父ちゃん、起きな。起きな。起きて。父ちゃん。

アキコ うなされていた父は、それで目を覚ます。昔の公務員の給料って安かったんだよね。

タダシ ああ。そうだと思う。

アキコ 貧乏だったんだと思う。狭い官舎に妹と母親と父親。わかっていたから、あまり無理は言わなかった。

タダシ うん。

アキコ でも、必要なものがあるでしょ。家庭科の裁縫箱とか。

タダシ うん。24色のクレパスとか。

母親 アキコ、少し待ってておくれ。

アキコ 少し待てば大丈夫だった。だから、あるとき、思い切って、母親に言ってみた。赤いビニールのレインブ

ーツが流行っていて、友達はみんな持っているって。

母親 アキコ、少し待ってておくれ。

アキコ 今考えれば、ずるかった。父親が、母から聞いたんだと思うけど、夕食のときに言ったの。

父親 もう2、3日待ってろ。

アキコ 何日かして、私と妹は、大喜びで新しい赤い靴をはいて、家中を歩き回った。「もう少し待ってろ」それは

魔法みたいで、少し待てば、望みは、いつもかなえられた。もう少し、もう少し・・・、いつかきつと買

ってもらえた。わたしは待つのが楽しみになった。

父親 もう2、3日待ってろ。

アキコ 中学二年の暑い日、7月3日、日付まで覚える。

照明が変わり、セミの鳴き声が降り注ぐ。

アキコ 汗をかいたので、校庭の脇の水道で顔を洗い、ハンカチを絞った。冷たいハンカチがあれば、暑い教室に

戻って、また汗をかいたときにいいに違いない。すぐいい事を思いついた感じで、わたしはうきうき

していた。すると隣のクラスの、名前も覚えてる。宮沢ちえちゃん。少し頭の弱い子だったけど、何度か

遊んだことがある女の子が立っていた。

宮沢ちえが隣に立つ。

ちえ アキコちゃんのお父さん、人を殺して死刑になる人を殺す仕事なんだって。

アキコ だれがいったの。

ちえ みんなの噂よ。汚い仕事だって。

アキコ ほんとに暑い日だった。でも、震えてきた。寒くて仕方がなかった。その子の次の一言。

ちえ ねえ。死刑囚を殺すとお手当がもらえるんだってね。特別の。いいなあ。

アキコ 食べたばかりのお昼を吐いた。はつきりとわかったから。給料日でもないのに、父さんが欲しいものを買ってきてくれたわけ。うなされていたわけ。霧が晴れたようにはつきりと。

タダシ

アキコ 次の日、学校を休んだ。ずる休み。買ってもらったものすべて、庭に投げすてた。思い出の品。買ってもらった時の喜び。楽しみに待っていた自分。もう少しもう少し……。わたしは何を待っていたの！ ねえ。

雨が降り出す。

アキコ 翌日だったと思う。雨の中、母親が庭から私が捨てたものを拾い集めていた。

母親が拾い集めている。

アキコ いらない。そんなものいらない。

母親 そんなこというもんじゃないよ。父ちゃんが買ってくれたんだから。

アキコ いらない。汚い仕事でもらったお金で買ったものいらない。皆に嫌われる。もう学校にも行けない、こんな家にいたくない、死にたい、死んでやる。恥ずかしい。恥ずかしい。そんなこというもんじゃないよ。父ちゃんが可哀想だから。

母親 母親は黙って泥を落とした。

アキコ

雨がやむ。

アキコ 母親には最期まで謝れなかった。父親とは、話しさえしないままだった。わたしは・・・
タダシ 話さなくても良い、もう話さなくていいから、
アキコ ダメ、それじゃ。
タダシ え。

一座の人間から二人に様々な声が突き刺さる。一座の人間が思いを込めて二人に放つ。

声

「拘置所看守は人殺し」

「お父さん達に言ってくれ。ヒトを殺すのはもうやめて。死刑は国家権力の殺人だ」

「わたしたちは、被害者遺族の会です。なぜ、殺人を犯したものの人権を守り、わたしたちの権利は守られないのですか」

「更生なんかしてほしくない。反省して真人間になったからって、なんなのっていうしかないんです」

「われわれにボタンを押させてください」

「仇討ちがなんで近代においてなくなったかわかってるのかな。あ、でも、こういうの、バッシングされるからな」

「遺族の方のお気持ち、お察し致します。それを考えると死刑しかありません」

「今度は私が遺族になるのかな」

「えん罪とかさいうけど、十人に一人が無罪だって、後の九人やつとかなきゃ安心できない」

「とにかく俺たちの税金で、食わせるのはぜってえいやだ」

「法律で決まってるって、決まったら、じゃあ死ぬの、あなたも？」

「執行人？ アホか。バイトでも募集すりゃいい。別に全く心痛めず 殺せる奴なんて結構いるだろう

よ。一死刑につき十万くらい？」

「そりゃ死刑判決を出した後はね、控訴してくれよ、って思ってますよ。裁判官だって人間なもの」

「え、死刑って看守がやるの？」

「いやならやめればいいんじゃないの、刑務官」

「裁判官がやるっていうのは」

「大臣とかでいいじゃん」

「死刑囚に押しせりゃいいじゃん」

「押しなかつたらどうすんのよ」

「あ、そうか」

「いやあ、任期中に、もう二、三十人、執行命令出しときゃ良かったよ」

「裁判官が死刑判決出して一生苦しむって、今までは関係なかったってことだよな」

「法により支配があるから、あなたも家族も愛する人も安全に生活できている。違いますか」

「死ねばいいのに。あんな奴」

「とよく言うが、死刑囚に向かって言う場合、それは『殺せばいいのに』と執行人に向かって言うのと同じ事だ」

「なぜだ。そうか、わしを恨んでおるのか」

「なにかんがえてんだろうなあ」

「お前らは、俺と同じ人殺しだ」

「何事も続けるのは、一筋の希望の光が見える場合だけにすぎない」

「すまぬ」

アキコ、タダシが、必死に声を制した。

アキコ わたしは、きつとわかってる。他の人の百倍くらい。でも、あなたの百分の一もわかっていないだろうと思う。でも・・・わかったの。子 どもができたらね、わかったの。私が嫌だったことを、この子に、ほかのだれにも味あわせちゃいけないって。誰にも渡しちゃいけない。母親になります。たとえば、あなたの奥さんでなくなっても母親を通します。

タダシ

・・・

アキコ

だって、そうしたら、あなたも、私が奥さんじゃなくなつて、この子の父親だつていうことからは、逃げ出すことは出来なくなるでしょ。

タダシ

アキコ

あたしたちにしかきつとできないよ。あなたとうまくやってる気になつていたけど、わざわざわして真っ黒い雲がずっとここにあつた。今まで話すこともできなかった。ねえ、一緒に生きていこうよ。わたしはあなたと結婚したことを、自分で選んだんだけこの子に言いたい。ねえ、わたしたち にしかできないよ。

タダシ

・・・（ある意を決して）親父はなんで俺に何にも言わないで、この仕事につけて言ったんだろうな。ひどい親父だな。・・・息子にしか言えなかつたんだろうな。

窓の外にぼっかりと月が浮かんでいる。

タダシ

あ。

アキコ

少し明るい。

皆も月をみる。月の下、初代サンソン。シャルル・サンソン・ドルがいる。ロンヴァ

断頭台の詩

ロンヴァル 空ゆく月

波の上の月

空を探る私の広い視線

流れる低い雲

雲の中の月

私の狭い視線

夜が腕を私の窓から差し入れた

傷ついた切れ切れの瞬間が

牢獄の中を通り過ぎていった

私は置く 見えない断頭台に置く

ありとあらゆる私の望みの

目なしの頭を

やがて、ロンヴァルと執行人たちの姿が、まばゆく光り、消滅する。

刑務官と上司2 現代

刑務官と上司がいる。

上司 なんだって？

「タダシ 今、申し上げた通りです。」

上司 じゃあ、仕事、やめるんだ。

タダシ 刑務官は、やめません。

上司 わからないな。言ってることが。

タダシ ここに、いる、わたしは、そのことだけはいいと思うことを言っています。本当に普通のことだけです。

上司 もう一度聞こうか。

タダシ わたしは、誰も殺したくないし、誰にも殺されたくないし、誰かに殺させられたくもないんです。それ

だけなんです。

エピソード

口上 いつまでも続くかと思われたいくつもの鎖のつながりは、断ち切れたのか、そうでないのか。

ようやくと出始めた芽は、育つごとに、いったいなんと言う名前の木になるのか。

それはご見物方の心の内次第。

彼らの姿を見て、残酷さ、血の匂い、罪の責任、

これら忘れかけていたものに、ひとまず眼を見張った方があれば、我ら一同、お目を汚した甲斐があつたというもの。

死刑執行人の言葉がいささか調子外れに聞こえたのなら、

それは我らの不徳の致すところ。

が、かつて社会の機構は三本の柱の上に立っております。

その柱は、神、

神の代理人である国王、

そして国王の代理人である死刑執行人でございます。
神は姿を消した、という声があがってもう久しく。
続いて、国王も姿を消した、そうした叫びがわき上がりました。
とすれば、次に、
死刑執行人が消えた、
という声があがっても、いささかの不思議はございますまい。

幕

台本を書くにあたり、実に多くの著作、web上の情報を参考にさせていただき、また、たくさんの方の話を聞きました。皆様に感謝致します。すべてをあげる事は出来ませんが、特に、引用・参考したものを以下に記します。また櫻井悟史さんには著作やメールのやりとりを通じ、特に多くの示唆を頂きました。劇中の「断頭台の詩」は岸田理生さんのものです。

『死刑執行人の日本史——歴史社会学からの接近』（青弓社） 櫻井悟史

「死刑執行人の苦悩」（角川文庫） 大塚公子

「元刑務官が明かす死刑のすべて」（文春文庫） 坂本敏夫

『死刑執行人サンソン——国王ルイ十六世の首を刎ねた男』

（集英社新書） 安達正勝

『ギロチンの祭典 死刑執行人から見たフランス革命』

（ユニテ） モニク・ルバイイ

『パリの断頭台』（法政大学出版局） バーバラ・レヴィ

『図説 死刑物語——起源と歴史と犠牲者』（原書房）カール・ブルノー・レーダー

『大江戸死体考——人斬り浅右衛門の時代』（平凡社新書）氏家幹人

『斬』（河出書房新社） 網淵 謙錠